

## 第14回夏期福音特別集会(1)

## わが生くるはキリスト——ピリピ書第1章

1967年8月25日

小池辰雄

飛躍的な一歩 初恋の所 み霊の祈りのすばらしさ キリストの名の中に自分を投げ込む 法  
 難 霊法 わが生くるはキリスト み霊がうちに生きているか 死ぬるは益なり 一即多 吾  
 に道なし 自在に動かすものは絶対の世界

## 【ピリピ1】

1 キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピにおる  
 キリスト・イエスに在る凡ての聖徒、および監督たちと執事たちとに贈る。  
 2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と  
 汝らに在らんことを。

3 われ汝らを憶うことに、我が神に感謝し、4 常に汝ら衆のために、願のつ  
 どつと喜びて願をなす。5 是なんじら初の日より今に至るまで、福音を弘む  
 ることに与るが故なり。6 我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・  
 イエスの日まで之を全うし給うべきことを確信す。7 わが斯くも汝ら衆を思  
 うは当然の事なり、我が繚綯にある時にも、福音を弁明して之を堅うする時  
 にも、汝らは皆われと共に恩恵に与るによりて、我が心にあればなり。8 我  
 いかんキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋慕うか、その証をなし給う  
 者は神なり。9 我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟とによりて彌が上  
 にも増し加わり、10 善悪を弁え知り、キリストの日に至るまで潔くして躓く  
 ことなく、11 イエス・キリストによる義の果を充して、神の栄光と誉とを顕  
 さん事を。

12 兄弟よ、我はわが身にありし事の反つて福音の進歩の助となりしを汝ら  
 が知らんことを欲するなり。13 即ち我が繚綯のキリストの為なることは、近衛  
 の全營にも、他の凡ての人にも顕れ、14 かつ兄弟のうちの多くの者は、わが  
 繚綯によりて主を信する心を厚くし、懼るる事なく、ますます勇みて神の言  
 を語るに至れり。15 ある者は嫉妬と分争とによりてキリストを宣伝え、ある  
 ものは善き心によりて之を宣伝う。16 これは福音を弁明するために我が立て  
 られたることを知り、愛によりてキリストを宣べ、17 かれは我が繚綯に患難  
 を加えんと思ひ、誠意によらず、徒党によりて之を宣ぶ。18 さらば如何、外貌



にもあれ、真にもあれ、孰も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。<sup>19</sup>そは此のことの汝らの祈とイエス・キリストの御霊の賜物とによりて、我が救となるべきを知ればなり。<sup>20</sup>これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適えるなり。<sup>21</sup>我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。<sup>22</sup>されど若し肉体にて生くる事わが勤勞の果となるならば、孰を選ぶべきか、我これを知らず。<sup>23</sup>我はこの二つの間に介まれたり。わが願は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遙に勝るなり。<sup>24</sup>されど我なお肉体に留るは汝らの為に必要ななり。<sup>25</sup>我これを確信する故に、なお存えて汝らの信仰の進歩と喜悦とのために、汝等すべての者と偕に留らんことを知る。<sup>26</sup>これ我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかわる誇を増さん為なり。<sup>27</sup>汝等ただキリストの福音に相応しく日を過せ、さらば我が往きて汝らを見るも、離れいて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、<sup>28</sup>凡ての事において逆う者に驚かされぬを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の兆、なんじらには救の兆にて、此は神より出づるなり。<sup>29</sup>汝等はキリストのために啻に彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり。<sup>30</sup>汝らが遭う戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くとおなじ。

### ● 飛躍的な一歩

第14回夏期福音特別集会、感慨無量であります。「特別」というわけで、皆さんも特別な気持ちでいらつしやったと思う。その特別たるゆえんは、また、これに対する態度は何か。この集會を終つた時に、どなたも一人も例外なしに、自分は質的に一歩はつきりと踏み出した、質的な前進をしたということをはつきりと自覚して帰つてもらいたい。

事実が証明するのであって、説明が説くのではない。魂の世界は、人をごまかしたり、ある時は自分をごまかしたりするけれども、神さまの前に神さまをごまかすわけにゆかない。そのことは結局、自分の姿に表われてきます。人がどうだこうだじゃない。この小池なんてやつを相対的に相手にしてる人は、必ず躓いていきます。けれども、このしようがない者を通して現れたもうところの何ものかを相手にしてる人は、私のいかにかわからず必ず前進していきます。

どうぞ、そういう心構えをもつてこれに立ち向ひ、そしてはつきりした一歩前進をしてください。その一歩は質的な一歩で、ただ地面の上を歩くような一歩じゃない。飛躍的な



一步である。平面上を一步前進したのではない。次元の違った世界へ飛躍的な一步をふみ入れたというわけです。

「誰が靈的である靈的でない。信仰がどうかだこうだ」、そんなことはどうでもいい。「自分の今がどうかだ」、そんなこともどうでもいい。

私は一般のキリスト教に対して戦っている。これは使徒パウロと共に私たちは、この三日間、戦いを自らに對して為して進んで行く。その一步は、もう一つ別な言葉でいうと、己を必ずはつきりと乗り越えて行くという一步であります。もう不転退です。退くことを知らない。それだけの捨身の悲願を持たずしてなんの福音への求めであるか。こういうわけで、行こうと思う。

ピリピ書がどうであるかという、註解書に書いてあるようなことは、私はここで言うのはごめんこうむる。どうぞ、そんなのは註解書を見てください。まあ一応のことは少し申し上げますけれども、そんなことを君たちは学びに来たんじゃありません。第一、このピリピ書四章全体を一節ごとにどうのやっつたって、三日間でできるものじゃない。四章、四楽章の大交響楽。今日は第一楽章と、こういうわけです。

### ●初恋の所

ピリピ書というのは、パウロが、おそらくローマに於いて書いたと思われれます。紀元60年か61年頃です。その十年程前にパウロはピリピを訪ねる。これは第二次伝道の時でありまして、パウロがそもそもヨーロッパに第一步をふみ入れた時に、最初に集会をしたのがこのピリピという町。そういう最初の、パウロにとつてはまさに初恋(エルステリーベ)の所なんです。1章のところでも、

8 我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋い慕うか、その証をなし給う者は神なり。

ということをパウロは言っている。古い聖書は「恋い慕う」なんていう言葉を卒直に使っている。いいですよ、それで。一番先に建てた教会で、二、三十人位のものだったらしい。

最初にパウロのこの福音を聞いた者がルデヤという女性である。使徒行伝16章を開いてください。

「パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。パウロこの幻影を見れば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣伝えしむる為に我らを召し給うことと思定めて、直ちにマケドニヤに赴かんとせり。さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、かしこよりピリピにゆく。」(使徒16・9〜11)

アレキサンダー大王のお父さんがフィリップというんですが、それが建てた町だからこ



の名がある。ちょうどアジアとヨーロッパとのかなめ、つぎめの所にあたり、アジアとヨーロッパの橋みたいな町です。非常に地理的にも印象的なところですよ。

「ここはマケドニアの中にて、この辺あたりの第一の町にして植民地なり、われら数日の間この町に留る。安息日に町の門を出でて祈場あらんと思わるる河のほとりに行き、そこに坐して、集れる女たちに語りたれば、テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと言う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。

この書き方に注目、「主が心を開いてきかしめた」と、神わざである。

彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を

主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強いて我らを留めたり。(使

徒16・12〜15)

もう、このルデヤは聖霊のバプテスマを受けましたから、嬉しくてしょうがない。それで「どうぞお泊りください」と、こういうわけです。簡単に書いてあるけれど、この最初の伝道におけるこの姿、パウロも非常に嬉しかったろうと思う。ザアカイの時は、キリストはどんな人かと思つて桑の木によじのぼつたら、

「今晚、お前の所に行つて泊まるよ」

と、キリストの方から「泊まるよ」ときた。

これは喜びにあふれている。これはパウロの最後の獄中の書簡です。コロサイ、ピレモン、エペソ、ピリピの四つが獄中書簡といわれ、しかもピリピ書は最後の書簡と言われる。その獄中からパウロは書いているのに、読んでゆけばわかるとおり、何回、「喜び」という言葉が出てくるか知れない。

だから福音なんです。喜びのおとずれ。福音を受けとつて——キリスト教ではない。教えだなんて云うから、こわばつてしまう。キリスト教ではない。教なんて云うから、「これは学ばなくてはいいかん、研究しなくてはいいかん」なんてやっているから、普通の聖書研究会なんてひとつも本当の世界に入らない——これはキリストの喜びの言葉である。喜びの言葉だから、これを受けとれば喜びざるを得ない。喜びの魂にならないうちはダメですよ。特に女の方は、しかめつつらしていたら、嫌になっちゃうよね。女の人は笑いがなくなつたらダメですよ。笑いとほただ「アツハハ」と笑うことではない。もう笑いを失なつたら人間はおしまい。笑いというのは、なんかへんてこな笑いではなくて、喜びから発するところの福音的な笑いです。福音的な笑いを持たなくては。

パウロは牢屋につながれていて、いつ首をはねられるか、殉教の死をとげるかというパウロが、

「喜べ、喜べ」

と言っている。これですよ。



皆さん。「私はまだ信仰が浅い」だとか、「まだ聖書の読み方が足りない」だとか、そういうことはもうなんにも心配いらん。もう嫌ですよ、私はそんなこといわれても。そのままでもいいじゃないですか。神さまはそのまま投げかけてくる人がほんとに好きなんです。何か、もう少し準備したり、整えたり、大いに研究して、「私はこれだけ聖書を研究した」なんて、そんな顔して出てきたって、神さまはダメなんだ。

パウロは、そういうどたん場において、全く喜びにあふれて書いている。なんとまあ不思議な人だろう。これが単なる悟りすましの世界とはちがうんです、福音の世界は。

### ●み霊の祈りのすばらしさ

祈り場に行く途中、占いの霊につかれた女が現れた。そして、

「……其の主人らに多くの利を得さずはしたため、われらに遇う。彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちはいと高き神の僕にて汝らに救の道を教うる者なり』 幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う

とにかく、占いの霊にしろ霊だものだから見えるんですよ、霊の世界が。相手が素晴らしきキリストの霊の世界には、普通の人とちがつて霊だものだから霊が見える。これはマイナスの霊だけでも、プラスの霊が見えてくる。暗黒の霊だけでも、光明の霊が現れたので、なんののかんと言いだした。

『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』 霊ただちに出でたり。」(使徒16・16〜18)

こういう句が所々に出ています。よく憶えておいてくださいよ、

「キリストの名によりて命ず、汝より出でよ」

と。もし、悪い霊にとつつかれたやつが来た時に、あなた方はキリストのみ霊の権威をもってこれを言って、相手を退散させることができます。この使徒的信仰に、この聖霊の世界に私たちが無条件に入るわけです。み霊を本當にいただければ、また、み霊に在ってキリストに祈れば、その祈りにおいて誰でもがその権威を持つのです。

ところが、この利害関係のことで、非常に「お前はじゃまをする」というわけで、女的主人たちがやって来て、パウロとシラスを捕まえて、牢屋に入れてしまった。

「多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず、獄守この命令を受けて二人を奥の獄に入れ、柙にてその足を締め置きたり、夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讚美するを囚人ら聞きいたるに、俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人のなわめとけたり。」(使徒16・23〜26)

えらいことが起きた。これがパウロの信仰の世界の、み霊の信仰の世界の、祈りの素晴



しきです。

これは、「自分の信仰」なんていうようなものを意識しているうちは、こういうすばらしい世界に入れない。キリスト、この神の世界の秩序をしっかりと力をもって守ってあり給うところのキリスト。これに対する全的な信。自分の信仰じゃなくて、それに対する信です。これは言葉で表現しにくいけれども、これが無条件に受けとられていく世界では、こういうことが起きるわけです。

皆さん、どうぞ、祈りというものは、決してただ長いことがいいんじゃない。祈りというものを非常になにか違ったものにしてしまっているようですね、普通のキリスト教は。

「主さまー」

という、この一言が祈りです。あと何も言わなくていい。

特にこの特別集会においては大自然に包まれて、この集会における祈りは東京の真中で四方八方遠慮して祈っているような祈りじゃダメです。遠慮したって、小さな声だって本当にその世界に入れますけれども、とにかくここではひとつも遠慮はいらん。本当に叫びの祈りを——何も大きな声を出せということではないけれども——魂から本当にうちわつた叫びの祈りを皆さんがしていただく。

人間というものは、あるときは外から見ていると「なんだ、あいつらは少し気がおかしいんじゃないか」なんて、

「神において狂えるなり」

というようなところに、ある時はならなければだめなんです。そこを本当にバーストと爆発して行くと、その先の世界がロケットみたいに進んで行く。ロケットも爆発しなきゃ進まない。スーなんてできやしない。ものすごく爆発する。ジェット機も爆発する時はおのすごい音がする。

その呼吸といいますが、その気合といいますが、それをのみこんだら、もう普段は馬鹿みたいな顔してたって、ちゃんとその世界に入れるんです。何もしてないような顔してたって祈りの世界に入れる。

空手の達人が喧嘩しようとするれば逃げて行く。本当に立ちむかったら相手を傷つけちゃうから、弱そうに逃げて行く。向うがいい気になって来たら、そりゃ大変なことになります。空手の達人みたいに逃げて行くような弱い人に見えて、実は本当の力を持つてる。そういう事になる。本当の人は、いつもわめき立てるような人じゃ決してない。どうぞ、そういう呼吸をつかまえてくださいよ。

パウロはそういう呼吸で、シラスもそういう呼吸で、この時は物理的な力を霊的な力でもって神さまがグワツと天変地異をおこして、戸となわめをはずしてしまつた。霊動したんだ、まさに霊動——地震じゃない——霊震、霊動した。霊震を起こさなくては。

こういうところを読むと、ああ楽しいな、すばらしいなと、私はパウロと一緒にこの中



に入って、皆さんもこのドラマの中に入って——聖書は教えじゃないんだから——ドラマの中に入ってパウロと共にこの神のドラマの体験を読みつつ、魂の奥で受けとって行くことです。それが本当に聖書を読んでいるのであって、この現実が化体かたいしてくる。その人はそういう質の祈りの人になってくる。

今の青年は惜しいな、どうして本当にもっと捨身で福音を求めないのか。私は東京大学に何年いたか知らないけれど、求めてきたのは十指に数えるだけ、とびこんでこない。内村鑑三先生は、

「青年の信仰なんてものはあてにならない。私は青年はあてにしない。三十を越えるまでは信仰なんてのはあてにならない」

と言われた。三十代の人がたくさんいるけれど、どうぞあてになる人になってください。人間、生まれてこの福音的な現実に入らなかつたら、つまらないですよ、信仰なんていつたつて。

だから今日は、

「使徒的信仰の本質は聖霊を宿すにあり」

「この火燃えたらんにはまた何をか要せん」

と書いた。その火を胸の中に本当にともして、山を降ってください。夜、山を降ると、「なんだ、あの人たちが通ると明るいな」なんて。もうこわいものは何もない。

ひとやもり 獄守が驚いて、あわてて自殺しようとしたから、

「自らそこなうな。私たちは何も逃げるんじゃないよ。神さまの栄光が現れたこと

をお前たちに見せてやりたい」

と。そこで、獄守と一家の者は回心して、皆そこで救われてしまった。

ああ、私は慕わしいな、この使徒たちの信仰の質を見てみると。宗教書なんて、たくさん読まなくなつていい。使徒行伝あたりをしつかり読んで、パウロさん、ペテロさん、ヨハネさんと親しんでください。「パウロはえらい、ペテロはえらい、ヨハネはえらい」なんてやってたらだめですよ。「ペテロさん、パウロさん、ヨハネさん」と言つて親しんでください。「キリストさん」とは、まあちよつと言えないけれども、でもキリストも、

「汝らは友なり」

と仰つてくださったから、そう言つても怒られないかも知れないけれども。これは「主さま」だ。

### ●キリストのの名の中に自分を投げ込む

そういうわけで、このピリピという所は非常に思い出の深い場所であります。ピリピ書にもどります。

「キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピにおるキ



リスト・イエスに在る凡ての聖徒、および監督たちと執事たちとに贈る。  
 2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と  
 汝らに在らんことを。

ローマ書を読んでもコリント書を読んでもガラテヤ書を読んでも、パウロは「使徒」と書いているのに、ここでは「使徒」と書かないで、ただ「僕」とだけ書いている。ピリピ書というのは非常に個人的な親しい書簡である。相手は個人じゃないけれど、切々たる心をもって書かれた書簡である。遺言みたいな最後の言葉です。使徒と言わず僕と言っている。パウロの最大の自覚はこの僕。結局は使徒と同じことです。神さまのお使い、キリストのお使いであって、キリストの仰る通り、その通り実行しようというのが僕という。イエスが神さまの僕である。「エホバの僕」という。

「聖徒及び監督執事」と書いて、「監督執事及び聖徒」と書いてない。一般の信徒のことをまず先に呼んで、それから監督執事と書いている。ここらに原始教会の監督とか執事がいわゆる職制的なものでなかったことがわかる。本来、制度的な教会でなかった。それがだんだん制度的になってしまった。制度になったから悪いというのではないけれども。どうせ人間のする事は、形はみんな相対的なことだから、どういう形だから悪いと決めつけるのはいかん。なんだっていいですよ。問題はいつも、形を破っているか、形なんてものに頓着しないでいるか、そこだけです。そうかといって、形のないことをもって大いに誇つて、「無教会」なんて云つて、今度は中味が何もなくなってしまった無じゃこまる。私の無は、そんな虚無の無じゃないですよ、私の云っている無の実存は。

監督執事というのはその時その時に皆の代りにいろんなことをする。今晚も役員がたくさんいます。これ監督執事です。その時その時みんな変わる。ちつとも決つてやしない。皆さんもみな、私も同じく、この聖徒であるに過ぎない。僕であるに過ぎない。コンダクターはただ一人、キリストです。

3 われ汝らを憶うことに、我が神に感謝し、  
 4 常に汝ら衆のために、願のつど  
 つど喜びて願をなす。

最初から、「喜んで」と書いてある。

5 是なんじら初の日より今に至るまで、福音を弘むることに与るが故なり。

「<sup>あずか</sup>与る」という字は「コイノニア」と同じ字で、一緒にみんな共同にやっているといるということです。

6 我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・イエスの日まで之を  
 全うし給うべきことを確信す。

パウロたちは「キリスト・イエスの日」、再臨の日というものはつきりと望みつづいた。いつも、終末的現実にあった。福音の現実が終末に直面している現実。私たちも、歴史の終りはいつ来るか、キリストはいつきたり給うか、ということに常に待ち望んでいるところ



ろの現実であります。今から何百年あとだか、何千年あとだか、そんなことを思ってるんじゃない。

「いつでもどうぞ、きたみ国を来らせ給え」

7 わが斯くも汝ら衆を思うは当然の事なり、我がなわめ繚綯にある時にも、福音を弁明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵に与るによりて、我が心にあればなり。

手かせ足かせ鎖につながれている事、これが「なわめ」。パウロは不当な迫害にあう。

### ●法難

仏教でいうなら、法難にあっているわけです。親鸞が9歳のときにこういう歌を書いた。

「恋しくば南無阿弥陀仏と称うべし、我も六字のうちこそあれ」

と。齊年坊という弟子が帰ろうとした時にその訣別にのぞんでうたった歌である。

「私のことが恋しくなったら南無阿弥陀仏と称えてもらいたい。我もその南無阿弥陀仏の六字の中にいるから」

と。やっぱり親鸞です。私はこの歌が非常に好きです。

「もう泣くなよ、私の心が平和で、極楽往生するように仏さまに祈ってくれよ。ほどなく私は浄土に行くが、伝え残すことは何もない。お前たちはどこまでも、お互いに許し合って平穏に仏さまの慈悲を受けて素直になってもらいたい。おたがい力を合わせて念仏門の功德を進めてもらいたい」

と言ったそうです。

「私のことが恋しくなったら、南無阿弥陀仏となえてくれ、私もこの六字の中にいる」

親鸞は「南無阿弥陀仏」という、称名することの中にもう自分がとつぷりといつもあるわけです。これが本当の祈りです。

「主イエス・キリストよ」

と叫ぶ時に、「主イエス・キリスト」という言葉の中に自分がいなくては祈りではない。祈りとは、体をもつて祈ることである。祈りとは、主イエス・キリストの名の中に自分を投げ込むことが祈りであります。何かお願いすることは祈りの末です。

パウロが非常に彼らを慕っている。彼らもパウロを慕っている。その慕っているパウロの心の姿は、親鸞に勝るとも決して劣らない心境が出ている。これが今日そこにかかげた、

「わが生くるはキリスト」

という一句であります。

日蓮が伊豆に流される時に、日照、日魯、日光とかいうお弟子さんたちに、



「自分は罪なくして流される身は是非のない仕方のないところ。お前たちの心はよくわかる。お前たちの悲しがつているのもよくわかる。だけれども悲しんでくれるな。この地にとどまって妙法の真諦を伝えるがよろしい。もし恋しくなつたらば、天上の月を見て、私だと思え。私も配所にあつて、この月を眺めてお前たちを想うよ」

と言つた。月に於てお互いに見ようじゃないかと。

ところが日魯は別れがつかなくてしようがないものだから、「どうか私もその舟に乗つてくれ」と言つて、追いつがった。その舟にとつつかまろうとしたら、舟の中の役人がつるぎを抜いて日魯のその手を切った。指を切られて、日魯はおつこちた。その血の手をあげながら、さようなならをしたという情景があります。

とにかく信仰の兄弟姉妹というのはそれほど親しかつた。これはお互いの中に本当に私の霊が燃えていたからです。私たちは兄弟姉妹と言いながら、ただいいかげんな兄弟姉妹じゃない。我々はお互いに、四十七士じゃないけれども、本当に福音のためには生死を共にしようというようなところがある。

日本人は、どうも今の若い人たちの中には、考えがすぐ物質的な、あるいは打算的なことが先に立つ。気合で行くようなところが非常に少なくなつてきている。テレビで昔のそういった芸居をやつたりすることはいいことですよ。知らない人たちにはドラマを通して教えるやる。一流のドラマは、あなた方は見たほうがいい。私も感激して見えます。

ところが、やつぱり日蓮のような人にそんな不当な処罰をしたものだから、法罰が現れまして、重時とかいうのがとうとう病床に倒れてしまった。その子供の長時とかいうのも全身不随の病に罹つてしまう。さすがに時頼も時宗も、どうもこれはちよつとうまくないようだ、夢でもやつぱり苦しめられる。すなわち、法が作用しているわけです。日蓮の如きものを処罰するとは何事であるか、というわけだな。それで、とうとう島流しがゆるしになる、とそう書いてあります。

### ● 靈法

靈法があると私は言いましたが、この靈法は厳として存在する。歴史を見ると、ずいぶん不公平で、そしてどうしてこのような人たちが死んでしまつたらうか、どうしてこのよくな人たちの血の叫びがお今も報いられないのだろうかと、涙がたくさんあります、人生には。本当にそうです。確かに不公平な面があります。封建時代なんてのはひどいところがある。

けれども、人生はこの世限りでない。必ず次の世に於いて、そのような不当な死をした、義のために血を流した人たちは、天界にのぼつていられる。悪いことをしていい気になつていた人は、その時はよきそうだが、みな地獄の鬼にされている。



もう少し、そういうことを——あまり小さい人には言っただけでいいかん、こわがるから——中学校から高校の人たちにははつきり言っただけがいい。道徳というものがどのようにあるかというものは、そういう宇宙の道徳的法則、神的法則というものがある。こういう霊的法則があるということを知らせる必要があるにある。

パウロがどんな仕打に会いましたも、コリント後書11章で、あれだけの患難にあっても、なお決してひるむことなく、喜び勇んで行くことは、彼は本当にキリストにおける福音の勝利というものを身につけていたからです。

キリストも十字架の上から、

「彼らはなすところを知らず。どうぞ許してやってください。滅びてしまおうから。」

どうぞ、私の十字架で許してやってください」

と言われた。その十字架を拒んだら、御霊を拒んだら、もうしようがないですよ。そういう厳かな法則が働いている。だから、私たちは間違ったら、「申し訳ありません」と平伏すよりしようがない。

「すみません」

「ありがとうございます」

このふたつの言葉を、心を忘れたら人間でなくなる。神さまに本当に感謝する心と、神さまの前に本当に申し訳ありませんという、この二つの心がなくなったら人間はだめだ。ところが、その感恩の心と謝罪の心が非常に失せてきたから、おそろしい。日本の国民は剣によって亡びるのではない。道徳法則の世界で亡びてしまおう、もしこのまま行くなれば。道徳法則に本当ののついている民ならば、武装なんかしなくたって勝ちます。

道徳法則というのは縦の道徳である。神さま相手の道徳であって、それを宗教という。いわゆる御利益宗教の、いわゆる霊的な力とか何とかいうのと、この福音の世界は質が違いますから。そこは皆さん、はつきり知っていなければいかん。どんなに霊的な宗教が現われたってびくともしない。そんなこととは違おうと、それだけのことを皆さんは、観念でもなければ、御利益でもない、本当に霊的法則の世界の、これを身につけた使徒的信仰ならば、絶対の場であります。

なんとまあ人生は勝利だろう。なんと楽しいだろう。どんな患難があっても、私たちがパウロ以上の患難に遭えますか。パウロは本当に人として、最も深刻な患難を通ってきた人です。そういうパウロさんが、それだけの患難を、なんとまあ喜びながら進んで行くことか。なんと不思議だろう、それはみ霊が来ているから。そこにある喜び。これがすなわちパウロの法難、迫害の事態であります。

### ●わが生きるはキリスト

14 かつ兄弟のうちの多くの者は、わが縲綯なわめによりて主を信ずる心を厚くし、



懼るる事なく、ますます勇みて神の言を語るに至れり。  
何にもこわいものはない、「ますます勇みて」と書いてあるでしょ。

15ある者は嫉妬と分争とによりてキリストを宣伝え、あるものは善き心によりて之を宣伝う。16これは福音を弁明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリストを宣べ、17かれは我が縲綑に患難を加えんと思ひ、誠意によらず、徒党によりて之を宣ぶ。

そういう宗派的なやつがいるんだよ。

18さらば如何、外貌にもあれ、真にもあれ、孰も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。

なんとパウロの心は大きいでしょう。ずいぶんインチキなやつもいるけれども、とにかくまあキリストを伝えてるから私は嬉しいよと。カトリックでも何教会でもいいよと、私が時々そう言うのも、このパウロの広い心です。ただ願わくは、それがうわべではなくして、本ものでありたいものだということですからけれども。

19そは此のこの汝らの祈とイエス・キリストの御霊の賜物とによりて、我が救となるべきを知らばなり。

あなた方の祈りの力を感じているよと。それから、「キリストのみ霊の賜物」、パウロはみ霊の賜物を非常に豊かにいただいている人です、コリント前書12章、14章を見てもわかるとおり。聖霊は一つです。しかし、賜物はいろいろある。そのいろいろな賜物を、パウロはなかなか多くいただいていた人である。使徒行伝のパウロの在り方を見ればわかる。また、書簡を見ていればわかる。不思議と力と諸々の知恵と言と、縦横無尽ですよ、パウロという人は。

20これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給わんことを切に願ひ、また望むところに適えるなり。21我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。

第1章の中心は、この20節、21節のところでありましょう。

「生くることは私にとつてはキリストである」

と、ギリシャ語通りに訳した方がいい。しかも

「死ぬことは我に益である」

死ぬことはなお結構なことであると。始末に悪い人です。

「生くるはキリストであつて、死ぬことは結構だ」

と。どういうことですか。

パウロが「生くる」と言ってる時には、もはや私たちが呼吸しているような単なる肉体的な命を言っているのではない。聖霊をいただかないで、「生くる」ということはないんで



す、パウロにとつては。聖霊の生命、聖霊の力、聖霊がすなわち「永遠の生命」ですから。聖霊を宿してあることが即ち生くるということだ。聖霊を宿してあることが即ち、私たちが生きているということ。

### ●み霊がうちに生きているか

藤井武先生が、「死んでもすか」なんて言われた。

「君たちは死んでるかね」

と。反対に、

「君たちは生きてるかね」

と、私はむしろそう言いたい。「生きてるか」ということは即ち、

「み霊が宿っているか、み霊のキリストがうちに生きていますか」

ということ。「何々に在って」という言い方がたくさんしてあります。「に在って」という言い方がどうも弱くとられている。本来は弱くないんだけれど。「キリストの中に」生きていること。

「エン・クリスト」

です。ここでは、

「生きていることがすなわちキリストだ」

と非常に強い。ということは、「キリストのため」だなんて言っているのではない、「私にとつて生くることはキリストのためです」なんて、説明しているんじゃない。生即キリスト。生くることはキリストであるということ。

「へえ、そんな境地はどうしたら得られるでしょうか」なんて。そんなのはなかなか得られませんよ。なかなか得られないけれども、これまたたやすく得られる。即ち、生くるという自分が何か特別な者でなければならぬと思つたら、そりゃダメです。この破れかぶれの者が、だめなやつが、人からもし見れば、「ああ、あいつはどうだこうだ」ときんざん言われるような私でありながら、

「何と言われてもいいよ、私にとつては、今生きているというのはキリストの他にないんだ、キリストというより他に言い方がないんだ」

という、そのだめな混沌たるやつの奥に、ここに御霊のキリストがある。こんな、なんの堪のと云われるような、まん丸でなくてゴタゴタしているやつがはつきりと、

「私にとつて生くるはキリストである。ダメだからこそキリストなんですよ。ダメでなければキリストなんて言いませんよ」

と。私はダメだからキリスなんです。徹底してそのダメということが——体裁で言うのではない——こんなやつが何になるかなんて言つたつて、「人間形成」とか「人づくり」とか言つたつて、こんなもの作つたつて何だ、そんなものは。どうにもならんじゃないか、ど



うつつま合わせたつて。キリストという全然質のちがったものが来なければどうにもならん。それでなければ、これがなくて、どんなに「生くる生くる」とがんばったつて、ちつとも「生くる」にならない。ダメな八方破れでありながら、このキリスト、み霊のキリストがこの胸三寸の中に居給うから、何といわれようと、

「わが生命は、わが生くるはキリストである」

と。これが我々の信仰である。もはや、「信仰」などと仰いでいるんじゃない。まさにキリストの中に交っている「信交」である。

問題ないでしょ、皆さん。どこがわるいのですか。「そんなずぶとい信仰があるか」と。ハイハイ、ずぶといです、これ以上ずぶといものはない。「まだ祈りが足りないじゃないですか、先生は」と。ハイ、足りません。「まだ聖書研究が足りないじゃないですか」と。そうです。「まだ人をほんとに愛していないじゃないですか」と。ハイ、愛していません、だめなんだ。「先生でも何でもありませんか」と。ハイ、先生でも何でもありません。だけれども、それであるからこそ、

「私にとって生くるはキリスト」

である。私はもう全身涙です。全身涙であり、全身血である。

これがキリストという、絶対無条件の恩寵を——十字架され給うた、そして私のためにすつかり十字架し給うたところの、また、「さあ、この命を受けろ」といつて無条件に迫り給うところの——このキリストの本願のおどろくべき圧倒的な恩寵というものを無条件にひれ伏して受けるときに、

「わが生くるはキリスト」

の他に何があるかという。

皆さんもこれを本当に受けとれば、もうこの瞬間にガラリと皆さんの実存は変っている。何もこわいこともなければ、

「自分がどうであるこうである、人がどうであるこうであるがみんなふつとんでし

まった。ああ、主さまー！」

と。

「我よりも何々を愛するものは我にふさわしからず」

というキリストは、

「我にとりて生くるはキリストである」

ということを言わしめんがために、ああいうことを言っておられる。

### ●死ぬるは益なり

22 されど若し肉体にて生くる事わが<sup>はたらき</sup>勤勞の果となるならば、<sup>いずれ</sup>孰を選ぶべきか、  
我これを知らず。23 我はこの二つの間に<sup>はま</sup>介まれたり。わが願は世を去りてキ



リストと偕に居らんことなり、これ遙はるかに勝るなり。24されど我なお肉体に留るは汝らの為に必要ななり。25我これを確信する故に、なお存なごらえて汝らの信仰の進歩と喜よろこびとのために、汝等すべての者と偕に留らんことを知る。26これは我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかわる誇を増さん為なり。

そうしたならば、

「もうこの滅びゆく肉体なんかどうでもよろしい、それ自体はどうでもいい、私はもうさつきと永遠の世界へ行きましよう。死ぬるは益なり。だけれども、もうしばらくとどまっていなければならぬのなら、福音を宣べ伝えるためにとどまっていなければならぬのなら、私はとどまっていますよ」

とパウロは言っている。

「どつちを選ぶほうか。私はむしろこの世を離れて、キリストと共にいる方が嬉しいな」

と、またそのあとで言っている。これは厭世でも何でも無い。パウロは福音をのべ伝えるためには、百年でも二百年でも三百年でも、彼は生きてでしょう、キリストがそうさせようとしたならば。

「よし、お前はここでよろしい」

と、パウロはローマでもって殉教の死を遂げてしまった。もはや普通の生死を完全にのり越えた。

「生くるはキリスト」

とは、永遠に生きていくということです。

「死ぬるは益なり」

もうどつちでもいい、そんなことはいつでも。肉体はいつ片付けられたって、霊体があるから。魂はただかでない。ちゃんと霊体が着せられてある。

「いかにしてもして甦よみがえらんためなり」

という。実に、あれは世の終りのことばかりではなくて、パウロは、もうキリストの甦よみがえりの命をいただいているから、現実本来に、

「霊体として甦よみがえらんがためなり」

と言っているんです。

私たちは、復活よみがえりの命をすでにいただいています。皆さん、何の不足があるでしょうか。どうなったっていいじゃないですか、死んでも死なない命をいただいて。もう、何と云いますか、おかすべからざるものがそこに光を発している。皆さん、一人一人にですよ。「私はまだ」なんて絶対に言うのはよそうじゃないですか。「誰々さんは霊的である」なんて、そういうことはよそうじゃないか。もう皆さん一人一人が神さまの前にかげがえのない光



を発している。

「我は世の光なり。汝らは世の光である」

と。この

「われはキリストなり」

という生命のみ霊の事態は、それを光と言おうが、愛と言おうが、何と言おうが、表現できない。だから、

「キリストと共にあらんことは、はるかにまざるなり。そして今度は天界から

私は仕事をしましょう」

なんてパウロは言っている。

私たちは主さまに祈って、み霊のとりなしにおいて、天界の今もなお生きているところのパウロ・ヨハネ・ペテロと、

「パウロさん、ヨハネさん、ペテロさん」

と言って、この天の万軍を本当に味方とし友だちとして、もう豊かな豊かな気持で進むことが出来る。それは聖霊がこなければ、そういうことはできない。彼らは聖霊の器なんだから。天の万軍が、

「よし、お前はしょうがないやつだが大丈夫だ」

と。そして進んで行ける。小池なんてを見てるやつは躓くから、このダメなやつをなお動かして、

「われはキリストなり」

と言わしめているその何ものかに感じろと。こういうことです。私は今、三日月だか二日月だか一日月だかしらんけれど、やがて満月になること、これ必定なりと。神さまの恩寵により。

でありますので、パウロさんがなんとキリストを喜んでいたか。

「キリストと共にあることがはるかにまざる。早く行きたいもんだ。永遠の命

の世界に行きたいものだ。まあ、しばらくもう少しこの福音のために戦って

くれよとおっしゃるなら、致しますよ」

と。そういう命です。

このすばらしい福音を知らない人たちがたくさんあるから、私はなんとかしてこれを知らせたいなと、学校でも学生を相手にやってるんだが、一向に私の悲願が受けとられない。

## ●一即多

27 汝等ただキリストの福音に相応しく日を過せ、

ここにも「キリストの福音」とありますね、キリストの喜びのおとずれ。私が「キリストの福音」という言葉が好きなのは、パウロの書簡のこういう言からなんです。キリスト



教なんてパウロは言いやしない、キリストの福音と言っている。よろこびの音信です。

さらば我が往きて汝らを見るも、離れて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦い、<sup>28</sup> 凡ての事において逆う者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の兆、<sup>ほろびしるし</sup> なんじらには救の兆にて、此は神より出づるなり。

全くその通り。

「汝らが霊を一つにして堅く立ち」

と。み霊は一つです。キリストの霊は一つである。一つの霊が皆さん一人びとりに100%に臨み給う。六十人いるから、六十分の一に分解してなんて、そんなことじゃない。

「心を一つにして福音の信仰のために共に戦い」

と。人間は、「霊と心と体」というような言い方をよくパウロはします。「心」というのは、もつと人間的な角度から言ってる世界です。「霊」というと、はつきりと聖霊のことにわかっているわけです。祈りも心で祈ったり、霊で祈ったりする。けれども、いつも祈りの世界では霊が主動的になっていなくてはダメです。

ここに「一つ、一つ」という言葉が出てきます。ドイツ語で「疑う」というのは、「二つに割れる」(zweifeln)という。「右しようか左しようか、こうだろうかああだろうか」と分裂しているわけです。

人生は、例えば仕事でも、実は私は学校の先生しながら伝道しているけれども、これももし分裂していたらだめなんです。これは私にとつては非常に長いこと、あるひとつの矛盾であった。ところが、聖霊をいただきましてから、その矛盾が取れてしまった。私は一体、学校の先生しながら伝道なんかしてもいいものだろうか、いったいどうなんだと。ルターさんは終身プロフェッソール(大学教授)、ルターさんも分裂しなかったからいいんです。

み霊を本当に宿すと、何をしても、あるいはそれが外側から二つのことをしているように見えても、これが一つという、「一」という中心をもって回転している。もつとたくさんこのことをしていても一つ。それが「一即多」という世界。

たとえばベートーベンにしろ、レンブラントにしろ、あるいは近ごろのピカソにしろ、いろんな絵を描いたり、いろんな様式の音楽を作ったり、多様性を持っている。多様性を持っているが、しかしそれはいつも一つ。「一」において、一即多という、「一」が「多」に自在に展開して行く姿なんです。

そういうようなことで、皆さんが生涯にいろんなことをなさつても、一つの中心がはつきりしていれば、それがたとえ——伝道なんかしなくてもいいですよ、けれども——何をしても、伝道であり、それが身をもって福音を証している、身証していることなんです。私たちにとって、「一つ」とは何かという、生涯を通して、何をしようとも、この福音を身をもって証しているという、これが「一つ」なんです。その在り方の深い質と、それが



ら目的が、キリストの栄光の現われとして神を証しする、キリストを証しするということが一つとなる。これは聖霊に於いては一つになる。そうすれば、聖霊の賜物はさまざまであつて、その人は、賜物が一つであろうと二つであろうと三つであろうと、そんなことはかまわない。

そうしますと、皆さんはやることに力が出てくる。また、希望が出てくる。そして、地上でもってそれが完成しないで未完成であろうと一向差しつかえない。「未完成の完成」という、未完成の中に完成の質がある。そういう生き方になってくると、「一日即ち一生」というような言葉があるとおり、力強い在り方ができる。人にはどんなにつまらないように見える仕事であつても、それができる。「あの人はなんてまあ、つまらないことをしているのだろう」と言われても、しかし、そのつまらなさの中に、おかすべからざるあるひとつの神的なものが現われている。男でも女でも。こういうようなことが本当に「一つ」という。なにも、「画的に一つのことをしろ」といったってダメですよ。そんなものは全体主義という。

「霊を一つにし、心を一つにして」

というのはみな、

「中心は福音であるぞ、中心はキリストであるぞ」

ということ。何をしてもいい。カトリックでもプロテスタントでも、無教会でも幕屋でも、どれだつていいですよ、みんなそれぞれ。何も大集会をしてワッショイワッショイなんて、秋にやつてくるビリー・グラハムみたいに大きな金を費やして日本中の牧師さんを招いてどうのこうのと、あんな「一つ」はしなくていい。ムダな話です。それぞれ、てんでん勝手にやつていってください。

そして、本当にここに於て福音が——「福音が」なんて言わなくたって——本当に福音を現わしている。それが、神さまが一番望み給うところの、多に於ける一なんです。そういった、「多に於ける一」という境地が本当に身につくまでは最後の世界じゃない。ドイツでは、ゲーテはそういう角度がわかっていた大詩人です。それが、本当の特殊性をつかみながら、ものすごい広さをもった心なんです。これは聖霊を受けなければ、そういう境地がこない。本当にキリストの霊の法則の中に自分をのつけてしまうんです。

### ●吾に道なし

今日こつちへ来る時に見てたら、波乗りしている人がいる。見てみると、波からずれちゃつた。あれは本当に波にのつかつてしまわなければいかん、キリストの波に。私はものを見る時、みんなそんな目で見ているんですよ。私はどういう体験もそういう角度からピシャピシャと見ている。これは、私において福音が一つにだんだんできてきたからだよね、そうでない時だつてあるけれども。もう、不思議な人になるですよ、不思議な人に。そうして、



誤解される。それは深い世界はわからないから。外から見ると何か矛盾しているように見えるから。しかし、そんなことはどうでもいい。もうひとつ奥の世界へはいったら。

孔子さんが、呂梁りりょうに出かけて行って、三十仞じんの高さの滝が——今の百メートル位——しぶきをあげて、その急流が三十里——今の二十キロ位——そこは亀も魚も泳げないものすごい激流の中を一人の男が浮きつ沈みつしていた。孔子は、身投げしたと思って、弟子たちをして救わしめようとしたわけだ。しばらくすると、その男が水からあがつて来て、乱れた頭髮で歌を歌い始めた。あきれて孔子がこの男にむかって、

「身投げかと思っていたら、あがつて来て、お前さんは歌をうたつていらつしやる。

この世の人とは思えない、こんな流れを泳ぐ秘訣は一体何ですか」

と。孔子だよ、聞いたのは。これは『列子』の中に出ている。そうすると、このさきの言葉がおもしろい。「それはどういう秘訣でしょうか」と聞いたたら、

「曰、亡、吾無道。吾始乎故、長乎性、成乎命、與齋俱入、與汨偕出。

従水之道、而不為私焉。此吾所以道之也。

孔子曰、何謂始乎故、長乎性、成乎命也。

曰、吾生於陵、安於陵、故也。長於水、而安於水、性也。

不知吾所以然而然、命也。」

「曰く、「亡し。吾に道なし、吾は故に始まり、性に長じ、命に成りて、齋うづまきと俱に入り、汨なみと偕に出づ。水の道に従いて、私わたくしを為さず、此れ吾がこれを道む所以なり」と。

孔子曰く、「何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂う」と。曰く、「吾、陵おかに生れて、陵に安んずるは、故なり。水に長じて、水に安んずるは、性なり。吾の然る所以ゆえんを知らずして然るは、命なり」と。」

「別に子細はありませんよ」と。「吾に道なし」、私には別に道なんてにはないと。

「吾、故に始まり、性に長じて、命になる、水の道に従って、私わたくしを為さざるなり、此れ吾がこれを行く所以なり」

と。別に道というほどのものはありません。私は故というものに始まって、性に長じて、命になると。「水の道に従って、私わたくしを為さざるなり」というのは、自分の何か考えでもってどうしようこうしようとして、そんなことをしているんじゃない。「此れ吾がこれを行くゆえんなり」、これが私が泳げたわけでありませうと。

そうしたら、孔子が

「何をか故という、又、何をか長という、性という、何をか命という」

と訊いたわけです。そうしたら、その答えが、

「曰く、我わが陵おかに生じて陵に安んずる、これ故也」

と。陸に生まれた人間である。そして陸の生活をそれらしくやっていると。要するに自然に従っているということ。これを故という。「水に長じて水に安んずる」、水泳に、水に慣れ



て水に親しんで、水に長ずること。そして水に安んずる、泳ぐこと、水に入ることがちつとも恐くなくなつて、そういうのを性という。陸では陸と成り、水では水と成るといふことなんだ、私に言わせれば。水には水と成る。

「吾の然る所以を知らずして然る、これを命といふ」  
 どうしてそうなるかということがわからないでそうなってしまうというのを「命」という。これが最後の境地なんです。この「命」になつたならば、これは本当の世界。ということとは、無自覚の無意識の世界で、その中を本当に動いているような、自然になり切っているような姿。この境地、

「然るを知らずして然るを命といふ」  
 というこの境地が、み霊の世界になると、これがわかつてくる。だからすばらしいんです、み霊の世界というのは。

み霊の世界に入つたならば、こういう句を見ると嬉しくてしょうがない。

「我然るゆえんを知らずして然るは、命なり」  
 と。本当にこれは、

「天也命也」  
 というわけです。この境地になつたら、激流の中にいて、もう激流にさかまかれる通りに、スーッと泳ぐことになってくる。この泳ぎの達人は孔子以上の世界に入つて、そして言うことがこうだ。支那の中にはすごいやつがやっぱりいますよね。私はもつとしっかり勉強しなくてはいかんと思つてます。

それが、み霊の光で読んでみると、そういうようなものを読んでいても楽しくてしようがない。そういうようなことが、一切のことに対して「一」の世界。ある一つのものをちゃんとつかまえてしまったから、これが自在に動いていく。「一即多」の呼吸の世界。そういうように皆さんが、

「み霊において、てんでん勝手なことをしていなさい。だけれども、本当の一つでいなさいよ」

ということなんです、パウロの言おうとしているのは。何かこわばつて、「心を一つにするってどんなことですか」なんてやっているのところがう。

### ●自在に動かすものは絶対の世界

他を少し引用してみるならば、いうまでもなくエペソ書であります。4章3節、

「平和の繋のうちに勉めて御霊の賜う一致を守れ。体は一つ、

キリストのエレクシアとしてのからだは、皆さんの集会としての団体は一つである。キリストのからだとして一つである。

御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つの望をもて召されたるが如し。主



は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、愛は一つなんです。

凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在<sup>いま</sup>し、凡てのものを貫き、凡てのもの内に在したもう。」(エペソ4:3~6)

パウロが「一つ、一つ」と言いながら、ものすごい遍在の境地をそこで展開している。これが、パウロが本当の一つをつかまえているゆえんです。いたるところこの「一つ」の消息が貫いているぞという。三位一体というけれども本当に一つ。三位一体ということを、なんかえらくやかましく、何かかんかと言つて議論しているけれど、おかしくてしようがない。

それだから、もういいでしょ。パウロの、

「我にとりて我が生くるはキリストなり」

となったならば、そういう相対的なところは絶しちゃっていますから。絶しているところの世界が本当に自在になる。

これが本当の意味において相対に生きるゆえんなんです。本当の相対を生かすものはそういう絶した世界です。「絶対」と「相対」というものを二つにしていたらだめですよ。それは観念です。本当の相対をして相対たらしめて、自在に動かすものは絶対の世界です。この私たちの相対界において、すでに私たちは絶対界に生きているわけです。地上を即ち天上として生きている。これがみ霊の現実である。だから、一所懸命でこの相対の世界を何とかして良くしましよとやっついていく。いくらよくならなくなつて決して失望しない。絶対が被っているから、神の国は必ず来る。どんなに徒勞に見えるような仕事も努力も決して空しくない、ということなんです。何と考えても、福音の構造はすばらしい。そこらの宗教と違う。キリストの霊をもつてあわされたところのこの福音の事態はビクともしない。それで、第一章、第一楽章はまず終りということにいたします。

